

「4歳～就学前の親子グループ活動」プログラムに関する検討

幼児教育センター 指導主事研究会議

荻原 恭子 山本 陽子 三島 敬子

I 主題設定の理由

平成6年12月、文部省・厚生省・労働省・建設省の4大臣の合意によって「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について（エンゼルプラン）」が策定され、国による子育て支援対策が本格的にスタートした。その後、社会全体で子育てを支援しようとする動きが高まり、全国的にさまざまな子育て支援策が取り組まれてきた。平成14年4月に開設された本市の幼児教育センターでも地域における子育て支援の実践の場として子育て広場（平成17年度より健康福祉局に移管、現在は「地域子育て支援センター」）の開設・運営に携わってきた。

また、子育て中の保護者の不安や心配に対し、電話や来所による相談事業も進めている。乳幼児期の子どもをもつ保護者の抱える子育てへの心配や不安は年齢により異なるが、成長とともに発達に関する不安が高まる傾向にある。現在、川崎市では子どもの成長や発達への相談として、保健福祉センターをはじめ、児童相談所・地域療育センターが挙げられる。しかし、専門性の高い機関への相談では、保護者にとって心理的に大きなためらいや不安が起こりやすい。

そこで子育て支援の一つの方法として、子どもの成長や発達に不安を抱えている保護者が気軽に参加し、子育てへのヒントを得たり、相談したりすることができる場が必要と考え、平成15年10月より「集団的な遊び」や「興味関心のある遊び」、「保護者グループ懇談」で構成された親子グループ活動を開始した。親子グループ活動は、「2歳～3歳」「4歳～就学前」の2つのグループに分けて行っている。今年度は、「4歳～就学前のグループ」に焦点を当て、様々なニーズをもつ保護者と子ども双方にとって有用な支援プログラムについて検討した。

II 研究の内容

1 「4歳～就学前の親子グループ活動」の概要

(1) 親子グループ活動プログラム実施方法

◆対象・・・子どもの成長や発達に不安を抱えている4歳～就学前の親子8組

◆期間・・・月2回 全6回（3ヶ月）

◆活動時間・・・午後2時～3時30分

（活動終了後から4時までは、自由に情報コーナーで過ごす時間）

◆募集方法・・・パンフレットを配布し、電話で申込み

<パンフレット配布先>保健福祉センター（7区）・地域療育センター（南部・中部・北部）
児童相談所（2ヶ所）・地域子育て支援センター（8ヶ所）・公私立幼稚園（88園）

◆スーパーバイザー・・・洗足学園短期大学幼児教育保育科 専任講師 小野里 美帆

◆ボランティア・・・心理系学部及び教育系学部で学んでいる大学生・大学院生、または子どもの遊び・発達に興味関心のある大学生・大学院生

◆担当スタッフ・・・幼児教育センター指導主事 2名

(2) 親子グループ活動の基本姿勢

参加者は様々なニーズをもち、グループ活動に対する期待も多様である。しかし、どの参加者も、日々の子どもの生活の中で「不安」を抱えている点については共通している。

そこで、活動の基本姿勢を次のように定め、活動に臨んでいる。

- 参加者の抱えている課題を理解する。
- 参加者が子どもの理解と子どもの可能性に気づく場とする。
- 個別の課題に寄り添い、今後に向けて共に考える。

(3) プログラムの概要

このプログラムは次の4つの場面から成り立っている。

支援場面	支援対象		ねらい	配慮点
	親	子		
集団活動場面	●	●	<ul style="list-style-type: none"> ・興味・関心のある活動を通して、自分の存在が認められ受け入れられているという安心感をもつ。 ・友達（2人、小集団）と一緒に遊ぶ楽しさを感じる。 ・（保護者）活動を通じた子ども理解。 	<ul style="list-style-type: none"> ・参加理由（課題）に合わせた、集団活動の設定。 ・活動の繰り返し。 ・観察に基づく子どもの評価と、6回を通じた支援目標の設定。 ・保護者に向け、子どもへのかかわりのモデルを提示。
遊び場面		●	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア・スタッフとの遊びから、家族以外の人との関係を結ぶ。 ・子ども同士がふれあう遊びの環境をつくり、他の子どもとの関係づくりを支援する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・個別支援（担当制）。 ・支援目標に基づいた支援。 ・連絡ノートを使った保護者に対する遊び場面の様子の伝達。
親のグループ懇談場面	●		<ul style="list-style-type: none"> ・スタッフや同年齢の子どもを育てている保護者との懇談を通して、いろいろな人の考えに触れ、子育てに対して前向きな気持ちをもてるようにする。 ・子どもへの理解を深め、子どもとのよりよい関係を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・悩んでいること、困っていることなどを話す自由トーク場面と、テーマを決めて話す場面を設定する。 ・集団活動場面や遊び場面のビデオを懇談で取り上げ、子ども理解に生かす。
個別支援場面	●		<ul style="list-style-type: none"> ・個人固有の不安を把握し、一緒に考える相談方法により、一人で悩まず共に考える人の存在を知らせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・親子の姿を読み取り、個別に必要な支援を行う。 ・保護者の気持ちを理解し安定を図る。

<プログラム実施時の留意点>

プログラムの作成・展開に当たっては、スーパーバイザーと連携を図りながら進めている。また、活動日にスーパーバイザーに参加してもらい、専門的な話や個別の相談に対応している。活動を実施するに当たっては、スタッフとボランティアで事前に「活動の流れやねらい」「一人一人の子どもの状況と支援目標」などについて打ち合わせを行っている。また活動後、一人一人の子どもについて読み取りを行い、子ども理解とかかわり方についてのミーティングを大切にしている。

(4) 1日の流れと6回のプログラム内容

今年度のプログラムより「目的」の項目をつくり活動への支援の明確化を図れるようにした。(＜表1＞は2回目までの活動内容)

＜プログラムの目的＞

- ◇活動を通して、自分の存在を認められ受け入れられているという安心感をもつ。
- ◇友だち(2人組・小集団)と一緒に遊ぶ楽しさを感じる。
- ◇友だちとの活動や遊びの場でやりとりに必要なことを体験する。
- ◇(保護者)子どもへの理解を深め、子どもとのよりよい関係(接し方、対応の仕方)を考える。

＜活動の流れ＞	
情報コーナーで過ごす	
14:00	集団活動 (2人組・グループ)
14:40	好きな遊び ー保護者懇談ー
15:20	集まり・連絡ノートを渡す
15:30	さようなら *情報コーナーで過ごす*

＜表1＞ ●・・・目的 ○・・・新たに加えた目的 □・・・保護者懇談での実施内容

回	活動名	目的	環境及び支援上の留意点	保護者
1	着席、 あいさつ、呼名、返事 ♪「バスごっこ」 「まねまねまねっこ」 「ゲーチャョキパー」ジャンケン 絵本「おおきなかぶ」 追いかけて遊び「むっくりくまさん」 <u>遊びの準備・片付け</u>	●指示の理解 ●名前の意識づけ ●応答 ●動作の模倣 ●音と動作の協応 ●タイミング ●勝敗の意識 ●感情の表現 ●絵の理解(応答) ●一緒に行動●ルール理解 ●場面の切替●指示の理解 ●協同作業	・絵カードにて、活動の流れを示す ・遊び場面の基本環境構成	□活動参加理由・自己紹介 ●親子の関わり方 ●子育ての困難さへの共感
2	着席、 あいさつ、呼名、返事 インタビュー ♪「バスごっこ」 「まねまねまねっこ」 「ゲーチャョキパー」「げんこつやまのためきさん」ジャンケン 絵本「ぼくのクレヨン」 追いかけて遊び「むっくりくまさん」 <u>遊びの準備・片付け</u>	●指示の理解 ●名前の意識づけ ●応答 ●動作の模倣 ●音と動作の協応 ○役割交替 ●タイミング ●勝敗の意識 ●感情の表現 ●言語理解(応答) ●一緒に行動●ルール理解 ○役割交替 ●場面の切替●指示の理解 ●協同作業	・絵カードにて、活動の流れを示す ・遊び場面の基本環境構成 ・活動の繰り返し	□活動の感想・困っていること・参加者に聞きたいこと ●親子の関わり方 ●子育ての困難さへの共感



集団活動場面



遊び場面

2 研究方法

プログラムの概要の中で紹介したように、プログラムは4つの支援場面から成り立っている。

それぞれの場面は相互に作用しながら保護者と子どもへの支援を可能にしているが、今年度の研究では子どもへの直接的な支援の場となる「集団活動場面」と「遊び場面」に焦点をあて、「個別の支援目標の設定」と「事例によるプログラムの検討」を進めた。

(1) 個別の支援目標の設定

ニーズに応じた支援を行うには、子どもの状態を把握しながら、6回の活動の支援目標を決めることが必要である。子どもの状態の把握としては、活動参加申し込み時に電話による聞き取りを行っている（「生年月日」「幼稚園・保育園入園の有無」「参加理由」「コミュニケーション」「興味のあること」など）。活動参加時の聞き取り資料と、活動の1、2回目の行動観察を合わせて、支援目標の設定を行っていたが、行動観察は個人の主観に左右されることが多い。

そこで観察の視点として、「グループ活動行動チェックリスト」を作成し、支援目標設定に活用した。

<表2> <グループ活動行動チェックリスト（一部抜粋）>

*行頭の番号は行動水準

観察日 平成 年 月 日()		グループ活動行動チェックリスト	
対象者		記録者	
○あいさつ ①自分からあいさつをする ②あいさつされると、あいさつする ③保護者に促されあいさつをする ④あいさつされると、顔を見る ⑤あいさつされても反応しない ⑥その他 ()	○活動開始時(入室時) ①言葉の指示に従い着席する ②着席の指示は分かるが場所が決められない ③周囲の様子を見ながら着席する ④個別に促されると着席する ⑤個別の指示で着席するが、すぐに動き出す ⑥着席できない ⑦その他 ()	○質問(インタビューなど) ①質問の内容に合わせて答える ②内容について個別に支援すると答える(選択肢・絵カードなど) ③質問の内容に合わせて答えようとするがややずれる ④質問の内容と関係なく話す ⑤答えようとする気持ちはあるが言葉が出ない ⑥関心がない ⑦その他 ()	
○保護者との関係 ①保護者についている ②保護者の近くで過ごす(絵本など…) ③一人で絵本を見る(読む) ④あちこち歩き回る ⑤外へ行こうとする ⑥走り回る ⑦その他 ()	○名前を呼ばれたら返事をする ①返事をする ②手を上げる ③返事の代わりにする ④名前を呼んだ人の顔を見る ⑤多少行動が止まる ⑥特に反応がない ⑦その他 ()	○絵本での問いかけへの反応 ①問いかけにすぐ答える ②問いかけ以外に絵本のことについて話す ③周囲の雰囲気と答える ④個別に聞くと答える ⑤聞いている ⑥絵本を見ている ⑦関心がない ⑧内容がわからない ⑨その他 ()	
○人との関係 ①自分から話かける ②声をかけられれば話す ③保護者となら話す ④保護者とも会話なし ⑤視線を合わせる ⑥ほとんど関心を示さない ⑦その他 ()	○活動を皆と一緒に、終了まで行う ①一緒に行う ②興味のある活動なら一緒に行う ③個別の対応をすると ④短い時間なら ⑤部分的に参加できる ⑥落ち着かない ⑦部分的に退出 ⑧一緒に場所にいられない ⑨その他 ()	○手遊びなど ①一緒にまねしてできる ②一緒にまねし、ゆっくりならできる ③一緒にまねし、部分的にできる ④リズムは感じているができない ⑤出来ない ⑥関心がない ⑦その他 ()	

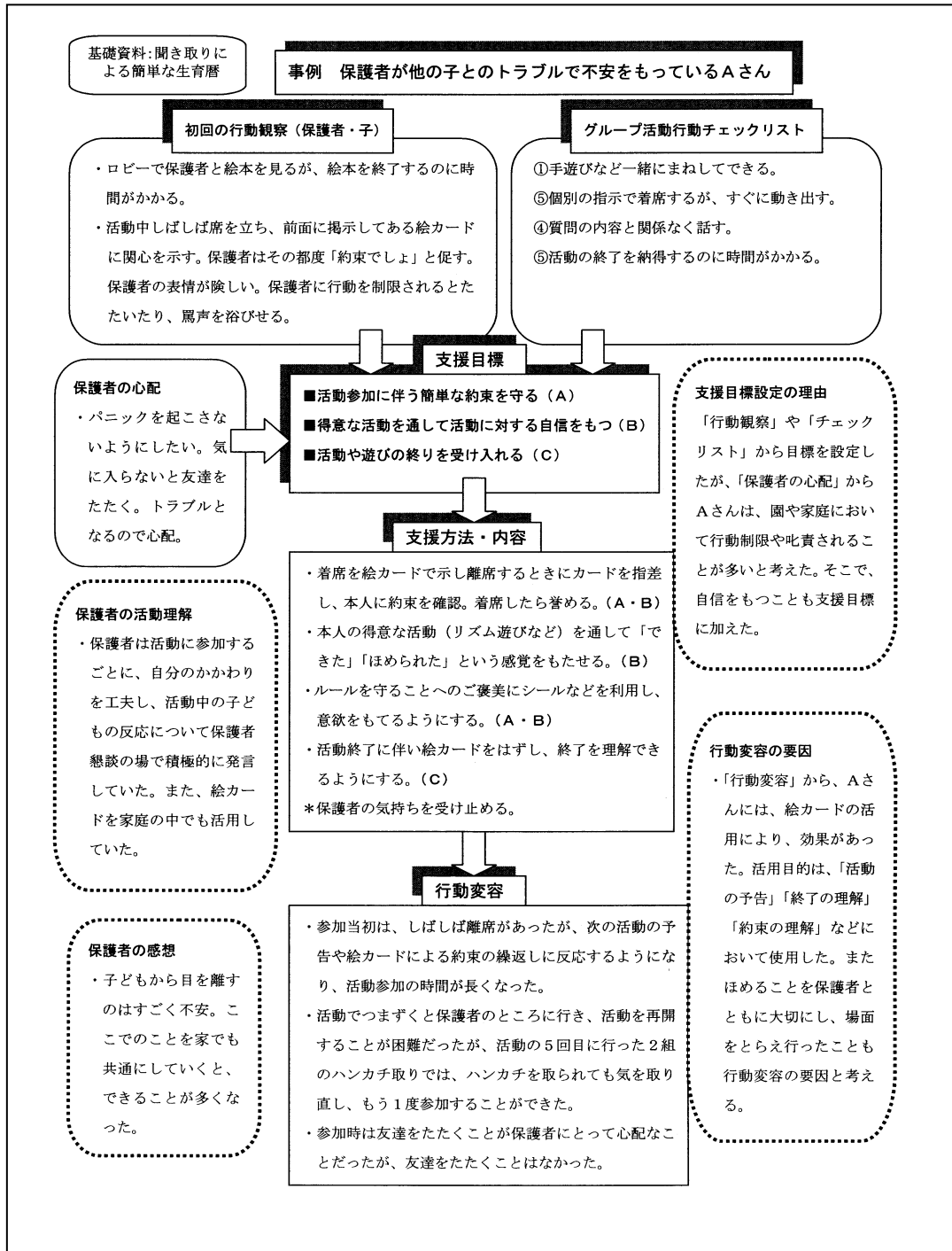
チェックリストには、客観性をもたせるために、場面や領域（会話、応答、指示理解など）ごとに19の項目が定められ、それぞれが7つ程度の水準に分けられている（<表2>参照）。チェックリストからは、行動水準の低い項目だけでなく、行動水準の高い項目（興味関心のある活動）も選択し、支援方法・内容を定めるときのがかりとした。

支援目標については、「初回の行動観察」「グループ活動行動チェックリスト」「保護者の心配」を基に、できる限り具体的に設定するよう心がけた。

場面や領域ごとに「グループ活動行動チェックリスト」を作成したことにより、具体的な支援方法・内容を決める際に活用しやすかった。また、チェックリストは評価ではなく、あくまでも観察による主観的な部分を補うものであるため、リストの項目や水準については、より活用しやすいものになるように、今後検討する必要がある。

(2) 事例によるプログラムの検討

初回の行動観察・チェックリスト → 支援目標 → 支援内容 → 行動変容の流れを考察することで、プログラムの検討を進めた。



このような方法で、平成17年度の2クルー目のグループ参加者8組それぞれについて、事例検討を行った。

<事例からの考察>

- 支援目標を設定する際には、活動参加時の聞き取りを基礎資料としながら、「初回の行動観察」「グループ活動行動チェックリスト」、そして「保護者の心配」を総合して設定した。保護者の抱えている心配が、子どもの行動に大きく影響を与えることを考えると、保護者の気持ちをとらえ、支援目標を設定していくことが重要である。

- 支援目標の設定は活動中の目的を明確にするだけでなく、終了後の振り返りの視点ともなり、一貫した支援を可能にした。また、「目標をより具体的にすること」や「目標を多くしないこと」、子どもの状態を常に把握し「目標の見直しを適宜行うこと」なども大切である。
- 保護者が、活動内容を日常生活と結びつけて理解することは、子どもの行動変容を生じさせることにつながると考えられる。その意味からも、日常生活につながるような活動の提供や、かかわり方の提案が必要と考える。
- 活動への参加場面の増加など、集団活動参加によるプラスの場面をつくり出すことは、子ども・保護者双方にとって、活動への自信やこれからの可能性を見いだすために有効である。活動が「その子の状況にふさわしいか」「活動への手順がわかりやすいか」「理解を助ける手立てが整っていたか」などの振り返りを行い、環境構成や活動内容を検討していくことが必要である。
- 保護者が活動での子どもの様子を、どのように見て感じているのかは、活動の評価につながる。保護者グループ懇談場面や感想用紙、終了後のアンケートなどを通して活動への評価を行い、プログラムの構成に生かしていくことが、活動をより充実させると考える。

Ⅲ 研究のまとめ

今年度は子どもへの支援を中心に研究を進めてきた。「個別の支援目標の設定」や「事例によるプログラムの検討」を進めることにより、ねらいや目的をもう一度見直す機会となった。6回という短い期間だが、子どもと保護者双方の変容が確かめられた。

私たちは、子どもの行動を見るとき、「できる」「できない」にとらわれがちになる。しかし、子どもが置かれている環境に視点を移して環境を少しでも見直したとき、新たな行動が生まれ、子どもへの理解が深まると考えられる。今年度の研究は、子どもに焦点をあてた研究だが、保護者の活動理解が子どもの行動変容に深く関係することも確認できた。今後は、保護者グループ懇談をどのように支援していくのか、スタッフの役割などについて明らかにしていきたいと考える。

また、今回のまとめには保育園や幼稚園での保育とのつながりについては提案できなかったが、活動を通して配慮してきたことなどを保育園や幼稚園に向けて提案していきたい。

現在、活動終了後、希望する保護者へのフォローアップのグループ懇談を月に1回行い、継続的に支援している。保護者は、フォローアップの中で困っていることや心配なことを話し、互いの情報を交換している。保護者の不安な気持ちを支え「気づき」を援助し、これからを共に考える場として、今後も活動を進めていきたいと考える。

最後に、研究を進めるにあたり適切なご指導をいただいたスーパーバイザーの洗足学園短期大学小野里美帆先生、ならびにボランティア募集にご協力いただきました各大学関係者の皆様、ボランティアの学生の皆様に心より感謝し、厚くお礼申し上げます。

【参考文献】

- | | |
|--|-------|
| 佐々木 正美『自閉症療育ハンドブック』学研 | 1993年 |
| 長崎 勤・小野里 美帆『コミュニケーションの発達と指導プログラム』日本文化科学社 | 1996年 |
| 竹田 契一・里見・恵子『インリアル・アプローチ』日本文化科学社 | 1996年 |
| 山崖 俊子編著『乳幼児期における障害児の発達援助』建帛社 | 1999年 |
| 黒木 保博・横山 穰『グループワークの専門技術』中央法規 | 2001年 |
| 小林 重雄監修 山本 淳一・加藤 哲文編著『応用行動分析学入門』学苑社 | 2003年 |
| メリーアン・デムチャックほか 三田地 真実訳『問題行動のアセスメント』学苑社 | 2004年 |
| 小枝 達也編著『保健指導マニュアル』診断と治療社 | 2005年 |